

発話行為と対照主題

富岡 諭

デラウェア大学言語認知科学科

要旨：日本語の主題を示す助詞「は」が対照の表現として使われ、不完全性、不確実性、非排他性といった意味論／語用論的效果をもたらすことはよく知られている。本論では、そうした効果が発話行為の代替集合 (a set of alternatives) 内での比較と、Griceの提唱した会話論理に基づく推論を通して派生するという仮説のもとに、対照の「は」の文法的特質と制約を音韻論、統語論、意味論、語用論の多角的な観点から検証を試みる。また対照の「は」とフォーカスとの方法論的比較という新たな要素を加えることにより、これまで顧みられることのなかった対照の「は」の意味の制約が系統的に説明できることを提示する。

1. 「不完全性」の表現としての対照主題

対照の概念は、形式意味論及び形式語用論においてフォーカス、強調の表現の関連としてしばしば取り上げられる。具体的な例として、Wh-疑問文に対する完全な回答(Complete Answer: (1a/a')), 否定肯定の対比の表現(AではなくB: (1b/b')), 分裂文/擬似分裂文 (1c/c')などが挙げられる。

- (1) a. Who failed the exam? [KEN]_{Focus} did.
a'. 誰が試験に落ちましたか? [ケン]_{フォーカス}が落ちました。
- b. You should major in [LINGUISTICS]_{Focus}, not [SOCIOLOGY]_{Focus}.
b'. 君は[社会学]_{フォーカス}でなく[言語学を]_{フォーカス}専攻すべきだ。
- c. It is [Erica]_{Focus} that I want to introduce to you.
c'. あなたに紹介してあげたいのは, [エリカ]_{フォーカス}です。

こうした場合、対照の意味論的效果は完全性(completeness)、確実性(certainty)、排他性(exhaustivity)などであるとされている。例えば(1a/a')では、解答が完全であるということから、「他に落ちた人はいない」という意味が暗示されるし、(1c/c')の文も、使えるコンテキスト(会話状況)として他の候補者を話者が紹介したくない場合や、「話者は真理を紹介したがっている」と聞き手が誤解しているのを訂正する場合といったケースが挙げられ、いずれも完全性、排他性を要求するコンテキストであると言えよう。しかし、対照の概念が取りざたされるのはフォーカスとの関連だけには限らない。例えば主題性(topicality, thematicity)は、プラハ学派や久野(1978)の語用論ではフォーカスとの対極に置かれているが、対照性との組み合わせが可能であることは、Kuno(1973)などで

既に指摘されており，対照主題(Contrastive Topic)という用語で意味論，語用論の研究の対象となっている．ただしその意味論的効果は，フォーカスの場合と異なり不完全性(incompleteness)，不確実性(uncertainty)，非排他性(anti-exhaustivity)というフォーカスにおける対照の効果と対極にあるものである点が興味深い．この意味のシフトは，日本語で対照のフォーカスと主題を比べることにより比較的簡単に観察することができる．例えば(1a)の質問の答えに部分的回答を示唆する表現を加えると，(1a)の助詞の「が」を使った文は不適當になり，代わりに主題を示すとされる助詞の「は」を使うことが要求される．

- (2) 誰が試験に落ちましたか？ 全員について知っているわけではありませんが，#ケンが/ケンは落ちましたよ．

本論では，対照主題の例としてこの日本語の対照の助詞「は」の文法と用法を取り上げ，その意味論的及び語用論的な効果について考察する．

不完全性，不確実性及び非排他性の表現の研究は，主に英語，ドイツ語などの西洋言語の観点からなされて来たが，こうした意味論的，語用論的な効果は特殊なプロソディー（韻律，イントネーション）と関連づけて論じられている．例えば，英語において語用論的必要性に基づく強調のプロソディーには2種類あり，それぞれが異なる機能を持つと考えられている．いわゆる「A-/B-アクセント」と呼ばれるもので，A-アクセントがピッチの高い位置からの下降であるのに対し，B-アクセントはA-アクセントに似た下降の後再び上昇するというパターンとなる．この2つのアクセントが与える効果について，具体的なれを挙げてみてみよう．

- (3) FRED ate BEANS.
B-Accent A-Accent

(3)の文はどのようなコンテキストで使われるのだろうか？典型的な例として，「学生たちは何を食べたか？」というような疑問文に対する回答としての状況が挙げられる．ただこの疑問文の主語が複数形であることから推測できるように，(3)は部分的回答(Partial Answer)して解釈され，「フレッド以外の学生については知らない／言及しない」といった不完全性，非排他性を示唆する．不完全性の対象となるのはB-アクセントある句であり，A-アクセントのついた句，BEANS，はフォーカスであるから逆に完全性／排他性の意味をもたらす．また(3)の文は，「誰が何を食べたか？」という問いに対する完全な最終的回答にはなり得ない．その場合は，主語も目的語も両方A-アクセントにならないのである．英語のA-/B-アクセント，そしてその意味論的，語用論的効果については，Jackendoff (1972), L. Carlson (1983), von Stechow (1994), Kadmon (2001), Büring (2003)などの先行研究がある．

ドイツ語における不完全性、不確実性及び非排他性の表現は、いわゆるRise-Fall Contourと呼ばれているプロソディーを使うことにより派生し、(4a)の文に見られるようなスコープの曖昧性を消す効果が出るということが知られている。¹

- (4) a. Alle Politiker sind nicht korrupt. (Büring 1997 から)
all politicians are not corrupt
'全て>否定'のスコープ: '全ての政治家が潔癖である' 又は
'否定>全て'のスコープ: '全ての政治家が汚職しているのではない'

b. /ALLE Politiker sind NICHT\ korrupt. ← Rise-Fall Contour
'否定>全て'のスコープのみ可能

'全て>否定'のスコープの意味即ち「全ての政治家が潔癖である」の解釈は、「汚職した政治家がどのぐらいいるか?」という問いに対する最終的な答えとなるのに対し、逆のスコープの「全ての政治家が汚職しているのではない」という解釈は、同じコンテキストで使われた場合、英語のB-アクセントと同様に部分的回答と解釈することができる。実際(4b)の答えを聞いた後でも、聞き手にとっては「全てでなくても、大部分の政治家はそうなのか?」「全てでないのなら、何人くらいがそうなのか?」といった、元の疑問に関連した他の疑問に発展することが予想される。これは(4b)が元の疑問に対しての最終的な答えではなく、ある意味で不完全な答えであったことを示唆するものである。

本論では、まず日本語の対照主題(対照の「は」)は英語、ドイツ語の例と類似した効果を出す一方で、西欧言語にない様々な特徴があり、西欧言語の対照主題に基づいて主張された既存の分析の直接の応用は不適用であると主張する。この点に関しては主としてHara (2006)を踏襲するが、平叙文以外の様々な発話行為文における対照主題や、普通の主題と対照主題との共通点など、これまで顧みられなかった新たな視点から対照主題をより総括的に捉えようと試みる。本論の核をなす仮説は「対照の主題は発話行為(speech act)の代替集合(a set of alternatives)を派生させる」というもので、この仮説とGrice (1975)で主張された会話論理の法則に則った演繹/推測を組み合わせることにより、対照の「は」の効果が引き出されると主張する。本論の分析では、対照主題の不完全性、非排他性は、発話行為の代替集合内での比較によって生じるため、Hara (2006)で主張されている話者の知識状況の不完全さだけでなく、礼儀、ためらい、じらしなどといった広義な意味での「言い残し」の効果と解釈される。また、発話行為レベルまでの抽出を助詞の「は」の基本的機能と推定することにより、対照の「は」と普通主題の「は」との接点を見いだすことができると

¹ このRise-Fall Contourは、対照主題に当たる箇所(上記の(4b)ではAlle)でピッチが上昇し、その後高く維持されたピッチがフォーカスに当たる箇所((4b)ではnicht)の直後に下降するというプロソディーのパターンである。上昇下降のパターンが、帽子や橋の形を連想させることから、Hat Contour、またはBridge Contourと呼ばれることもある。

いう利点も持つ。第4節では、対照主題とフォーカスとの相互作用について考察する。対照主題は、「言い残し」の理由の多様な憶測を招くが、対照主題とフォーカスの方法論（ストラテジー）の比較というプロセスを経て憶測の可能性の制限が起こることを、実際の例の検証を通して明示する。第5節では、本論で提案する仮説の最も重要な課題といえる埋め込み文の中に現れる対照主題の分析を試みる。この問題は、発話行為という意味範疇が構文的な埋め込みの対象となるかどうかという研究者の間でも論争的になっている問題と密接に関係している。本論では決定的な確証は提出できないが、少なくとも発話行為の埋め込みの可能性を示唆する事実を示し、対照主題との関連を考察する。

2. 日本語の対照主題

2.1. 不完全性の表現としての対照主題

第1節で挙げた英語のA-/B-アクセントの例を日本語に当てはめてみると、B-アクセントが対照の「は」の句に、そしてA-アクセントが強調、フォーカスの句に対応する。

(5) A: 学生たちは何を食べた？

B: エリカは豆を食べた(けど)

(5B)は「他の学生については知らない／よくわからない／言いたくない」というような効果をもたらし、英語のA-/B-アクセントの例と同様に(5A)の問いに対する部分的回答の役割を果たす。重要な点は、こうした不完全性の効果を日本語で出すのには、イントネーション、プロソディーだけでなく正しい助詞の選択が不可欠だということである。例えば、前出の(2)でも観察されたように、「は」を「が」に置き換えてしまうと、イントネーション、プロソディーをどう変えても同じ効果は出せない。

またHara(2006)では、ドイツ語のRise-Fall Contourで見られたスコープの曖昧性の排除と似た現象が、日本語の対照の「は」でも見られることが指摘されている。

(6) a. みんなが来なかった。 ‘みんな>否定’のスコープ

b. みんなは／みんなは来なかった。 ‘否定>みんな’のスコープ

(6a) のような否定文で主語である普遍数量化詞が格助詞の「が」と現われる場合、普遍数量化詞が否定の「ない」より高いスコープを取るが、「が」が対照主題の「は」に置き換えられると、スコープは逆転する。パターンとしては、前述のドイツ語の Rise-Fall Contour はスコープの曖昧性の消去、日本語の場合

はスコープの逆転と全く同一ではないが、対照主題により‘否定>みんな’のスコープが出るという点が共通している。

2.2. プロソディー

日本語の対照主題の解釈においてプロソディーが重要な要素であることは疑いがないが、英語、ドイツ語とは異なり、日本語の対照主題はそれ特有のプロソディーがあるのではなく、基本的にフォーカスと同じパターンのプロソディーが与えられている。日本語のフォーカスのプロソディーは、(i) フォーカスされた句内のピッチが上がり、(ii) フォーカスの句の後になる部分のピッチの急激な下降 (Ishihara 2003 では *Post Focus Reduction* と呼ばれているもの) というパターンを示す。この(i)と(ii)のプロソディーの型は、対照主題においてもフォーカスの場合と同じように現れる。(日本語のフォーカスのプロソディーに関しては、*Pierrehumbert and Beckman 1988, Nagahara 1994, Ishihara 2002, 2003*などを参照)²

このように見ていくと、日本語の対照の「は」を、フォーカス+助詞の「は」と捉え、それを英語のB-アクセント、ドイツ語の*Rise-Fall Contour*の*Rise*の部分の意味機能と対応させることができるのではないか、という仮説が当然出てくるのであるが、これには大きな問題がある。日本語の対照主題は、文の中での唯一のフォーカスになることが可能であり、また下の例文に見られるようにWh-疑問文の答えに対照主題が使用可能であることを考慮すると、主題という概念に通常伴うと考えられている「既知の情報」の制約が対照主題には当てはまらないことがわかる。

² 対照主題のプロソディーには、「は」がつく句に高いピッチが来るパターンと、「は」そのものに高いピッチが来るパターンと2種類あり、また「は」を高く発音する方が普通という人も多い。助詞のピッチを高くするプロソディーもフォーカスプロソディーと呼べるのか、またどちらのピッチが高くなるかで意味が違うのではないか、という疑問が当然出てくるのであるが、ピッチの頂点の位置の曖昧性は、(i)の例でも見られるように、一般的に取り立ての表現全般に見られることであって、対照主題だけの問題ではない。

- (i) a. なおやだけ／なおやだけ
- b. なおやさえ／なおやさえ
- c. なおやも／なおやも

取り立ての表現は、通常フォーカス現象の1つと考えられており、その観点から言えば対照の「は」のプロソディーが基本的にフォーカスプロソディーであるという説に問題はないと思われる。この結論は、「は」を「だけ」「さえ」などと同様に取り立て詞の一つとして捉えるOshima (2008)の主張とも互換性を持つ。また(i)の例において、ピッチの頂点の位置によって意味が変わるかについてであるが、決まったパターンはこれまで報告されておらず、判断の難しさを反映しているように思われる。

(7) A: 誰が試験に受かったの？

B: ケンは／ケンは 受かった（けど）．

(8) A: 明日の食事会に何人来るだろうねえ．

B: 10人は／10人は 来るでしょう．

(9) A: ハイブリッドの車って、いくらするもんなんですか？

B: まあ、25000ドルは／25000ドルはしますよ．

この問題は既にHara (2006)で指摘されているように、英語のA-/B-アクセント、ドイツ語の Rise-Fall Contour の説明としてよく知られている Büring (1997, 2003) の分析の日本語への応用に対するハードルとなっている．Büringの理論では、A-/B-アクセント、Rise-Fall Contour の Rise と Fall のアクセントといった2種類のことになったアクセントの存在が前提となっているが、日本語の対照主題のアクセントは基本的にフォーカスのプロソディーであり、また対照主題が文の唯一のフォーカスでありうるため、Büringの理論を日本語に応用するには大幅な修正が必要となる．

2.3. 対照主題と様々な発話行為

これまでの対照主題の研究は、平叙文内での分析が殆どでその他の発話行為文における使用例はあまり顧みられることがなかった．これは恐らくは西欧言語において対照主題が使われることが平叙文以外にあまりないことに起因していると思われる．日本語の場合、対照主題の「は」は平叙文以外の様々な発話行為につながる文にも表れる．³

(10) 疑問文(Interrogative)

じゃあ、エリカは／エリカは どこに行ったの？

(11) 命令文(Imperative)

英語は／英語は ちゃんと勉強しておけ．

³ 唯一対照主題が現れない発話行為文は、感嘆文である．

(i) #マリは／マリは なんてやさしいんだろう！

この理由に関しては現時点では憶測の域を出ないが、感嘆文が談話の進歩に寄与しないこと（例えば、感嘆文は疑問文の答えとして使えない）が関連していると考えられる．

(12) 勧誘文(Exhortative)／意思文(Volitional)

せっかくだから、京都には／京都には 行こう (よ) .

(13) 遂行文(Performative)

ストライキのため、今日は／今日は 休講とする.

こうした現象は、Hara (2005, 2006)や Hara and van Rooij (2007)で主張された話者の知識状態を基本とする分析では簡単に解決できない. 例えば Hara (2006)では、対照の「は」の使用は、表現された命題よりの意味の強い代替命題 (alternative proposition) の存在を前提とし、また話者はその意味の強い代替命題が偽である可能性があると感じている、という含意 (implicature) が派生すると主張されている. しかしHaraの分析は、疑問文において「意味の強い代替疑問」をいかに定義するか、また疑問文に対して「真偽」という概念があてはまるか、といった複雑な問題を抱えることになる. また、命令文、勧誘文、遂行文などは、礼儀の問題、遂行の可能性といった話者の知識状況とは異なるレベルの意味が問題になることがあり、単に話者の知識状況だけでなく、より多面的な視点が必要であろう.

2.4. 助詞の「は」の使用

第2.1節でも触れたように、日本語の不完全性の表現には、プロソディーだけでなく特定の形態素、すなわち助詞の「は」の使用が不可欠であり、この点が日本語と西欧言語との最も顕著な違いであると言えるだろう. 助詞の「は」が普通の主題 (thematic topic) を表すことは日本語研究者のみならず海外の情報構造研究者にもよく知られている. その主題の助詞がなぜ対照主題にも使われるのか? 普通の主題と対照主題は、「は」が使われているという点を除けばあまり共通点はなく、かえって相違点の方が目立つ. 例えば 対照主題の「は」は、動詞句や形容詞句の一部などにもつけられるが (例: 読め**は**する, 美しく**は**ある), こうした述語的な範疇は「こと」「の」などにより名詞化されない限り普通の主題になり得ない. また、普通の主題がほぼ決まって文頭に現われるのに対し、対照主題にはそうした傾向はなく、文頭、文中、文末 (特に前述の述語的な範疇に着く場合) と取り立てて決まった位置はない. 加えて第2.2節で述べたプロソディーの違い、情報構造的性質の違いなどを含めると、普通の主題と対照主題の相違点は、音声音韻的なもの、構文的なもの、語用論的なもの、と多岐にわたることがわかる (表1参照).

表1

	普通の主題 (TT)	対照主題 (CT)
フォーカスプロソディー	なし	あり
文内の位置	一般的に文頭	文頭以外でも現れる
主題になりうるもの	名詞句かそれに近いもの	範疇の制約なし
談話的制約	殆どが既知の情報	制約なし

こうした状況の下では、普通の主題と対照主題との間に原則的な共通点を探るという試みはあまり顧みられることがなく、同じ助詞に2種類の違った用法があるというカタログ化で終わってしまいがちである。だが、韓国語の主題の助詞 *-(n)un* にもほとんど全く同じパターンが観察されること、主題の位置が構文論的に固定されているマジヤール語では、その主題の位置が対照主題に使われ、また日本語とよく似た特質を持つこと（例：不完全性の意味の派生、述語的範疇が対照主題に限って主題の位置に来ること、など）を考慮すれば、対照の「は」の意味における主題性の役割、また2種類の主題に共通している要素を探ることは有意義であると言えるだろう。

2.5. 概略

日本語の対照主題の特徴をまとめてみると以下のようなになる。

- (14) a. 英語、ドイツ語のように、不完全性を示唆する表現として使われる。
- b. 特別なプロソディーではなく、フォーカスのプロソディーである。
- c. 情報構造的な既知／未知の制約はない。
- d. 平叙文以外の文にも使われる。
- e. 普通の主題と同じ助詞が使われる。

本論では、こうした特徴を解明するに際し、対照主題専用にあつらえた法則、前提、含意などを取り除き、必要最小限の要素を組み合わせることを試みる。具体的には、対照主題のフォーカスプロソディーの貢献と、助詞の「は」の役割を結合し、それに独自に必要とされる法則、とりわけ Grice (1975) の会話論理に基づく推論を加えることによって対照主題の意味論／語用論的效果を出すシステムを提案する。

3. 発話行為の対照

3.1. 新仮説：発話行為の代替集合

日本語の対照主題の特異性と英語、ドイツ語のプロソディーによる不完全性の表現に似た効果を出すために次のような仮説を立てる。

- (15) a. 対照主題は発話行為(speech act)レベルの現象である。
- b. 「不完全性」「不確実性」「非排他性」などの効果は発話行為の代替集合 (set of alternative speech acts) を通して発生する。

上記の仮説に必要な理論的背景は次の2点である。まず、Krifka (2001, 2002, 2004)で主張されているように、発話行為は文構造の一部として存在し、Speech Act P 或いは Force Pとして具現化されると推定する。意味論の領域でも、発話行為は個体(Type *e*)、真偽の値(Type *t*)、可能世界(Type *s*)などととも、基本タイプ (Krifka 2001 にならいType *a*とする)としてタイプ理論の中に組み入れられる。発話行為のオペレーター (演算子)のタイプは、ファンクション (function: 関数) $f: D_{\tau} \rightarrow D_a$ であり、 τ は個々のオペレーターが選択する文のタイプと推定する。例えば、主張行為のオペレーターの場合、 τ は命題のタイプ (Type $\langle s, t \rangle$)、質問行為のオペレーターの場合は命題の集合のタイプ (Type $\langle \langle s, t \rangle, t \rangle$ 或いは $\langle \langle s, t \rangle, \langle s, t \rangle \rangle$)となる。⁴ 本論ではタイプ理論の詳細よりも、発話行為が統語論的、意味論的実体を持つことにより、スコープや接続などの現象に直接関連したり、また以下で述べるフォーカスの代替意味論との関連により代替集合の対象となるなどの実践性の側面に注目したい。

次に、フォーカスの分析として標準理論となっているフォーカスの代替意味論(Alternative Semantics for Focus: Rooth 1985, 1992, Kratzer 1991 など多数)を本論でも採用する。フォーカスの定義には様々なものがあるが、代替意味論ではフォーカスされた表現以外の選択肢の存在に注目し、それを形式化しようとする理論である。代替意味論の仕組みを理解するのに最も適しているのは、(16ab)にあるようなフォーカスの位置の他は全く同一である文のセットである。

- (16) a. 真理は[神戸で]_{フォーカス}エリカに会った。
 b. 真理は神戸で[エリカに]_{フォーカス}会った。

(16ab)はフォーカスの位置は異なっているが、どちらも「真理は神戸でエリカに会った」という命題を意味することには違いがない。代替意味論では、これを通常の意味 (ordinary semantic value)と呼び、フォーカスの位置に左右されない意味として定義される。しかし通常の意味だけでは(16ab)の使われるコンテキストの違いを説明することはできない。ここで焦点となるのがフォーカスされた表現以外の選択肢の存在である。例えば(16a)では「神戸で」がフォーカスされているが、この文は「神戸以外の他の候補地」が考慮されている場合に使用され、一方で(16b)は「エリカ以外の候補者」が発話の際に念頭に置かれている。(17ab)はこうした他の候補を含む集合であるが、これらは一般的に代替集合 (set of alternatives)と呼ばれている。

⁴ 英語のassertionにあたる発話行為を、本論では「主張行為」と呼ぶ。論理学などでは、普通「断定」と訳されているが、日本語学では「断定」という用語が「のだ」文のような構造の記述として用いられることもあるため、ここではあえて使用しない。ただ「主張行為」でも「何か争点となっていることに関して自分の意見を述べる」という一般的解釈よりは弱く、「話者が真であると思う命題を新情報として提供し、会話の進歩に貢献する行為」という捉え方をする。

(17) a. (16a)の代替集合

{真理は神戸でエリカに会った, 真理は大阪でエリカに会った, 真理は京都でエリカに会った, 真理は奈良でエリカに会った}

b. (16b)の代替集合

{真理は神戸でエリカに会った, 真理は神戸で由加に会った, 真理は神戸で奈々子に会った, 真理は神戸でジュンに会った}

この代替集合は、文の二義的な意味範疇であるフォーカスの意味(**focus semantic value**)がさらに制約されたものと定義されており、この意味範疇が取り立て詞(*only, even* など)の領域を制約したり、どのようなコンテキストでフォーカスを伴った文が発話されるかを規制したりする役割を果たすのである。

この代替意味論を、発話行為が統語論的、および意味論的実体を持つという仮説と組み合わせると、これまでにあまり考慮されなかった可能性を引き出すことができる。すなわち命題だけでなく発話行為も代替集合の対象となるという点である。前述のように対照主題もフォーカスのアクセントがあるので、フォーカスと同様に代替集合が作成されると考えることはごく自然であるが、対照主題の代替集合がどのように機能するかがフォーカスとの違いを決定づける鍵となる。これが(15a)で述べた主張の核となる部分であり、対照主題が発話行為レベルの現象であるという考えは、具体的には対照主題で派生した代替が命題レベルでとどまらず、発話行為の代替集合まで達するというものである。フォーカス表現の代替集合は、取り立ての副詞 (*only, even, always, etc.*)や排他オペレーター (**exhaustivity operator**)の領域となりうるが、対照主題の場合そういった命題レベルでの数量化はされずに、必ず発話行為レベルまで代替集合が保存され、その結果として発話行為の代替集合が派生すると仮定するのである。この仕組みを比較的単純な例を使って検証してみよう。

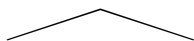
(18) A: 誰が試験に受かったの？

B: ケンは／ケンは 受かった (けど) .

(18B)は(19a)で示されるLF構造を持つと仮定する。(19a)で注目すべきなのは、発話行為が **SAP (Speech Act Phrase)** として構造に具現されていること、および対照主題にフォーカス指標 (**focus index**) がついていることである。後者は **Kratzer (1991)** のシステムを踏襲するもので、一般によく知られている指示指標(**referential index**)とは異なり、代替集合、すなわちフォーカスの意味を発生させる際にのみ必要なもので、フォーカスの意味の演算の時に変数となって代替の派生を起こす。ただし通常の意味の演算の際には意味を持たず無視される。(詳しくは **Kratzer (1991)** および **Beck (2006)** を参照。)

(19) a. LF

SAP



ASSERT

IP

[ケン₁は]_{CT}受かった

b. 通常の意味: ASSERT(λw . Ken passed in w)
即ち ケンが受かったという主張行為

c. フォーカスの意味:

{a: $\exists h$, h is a distinguished assignment, a = ASSERT [[[[KEN]_{F1 CT} passed]]^{g, h}]
= {a: $\exists x \in D_e$. a = ASSERT(λw . x passed in w)}

即ち, 「Xが受かった」という形の命題の主張行為の集合.

仮に, ケン, エリカ, マリの3人が考慮されている場合, (19c)は次のような集合に制約される:

(20) {ケンが受かったという主張行為, エリカが受かったという主張行為, マリが受かったという主張行為}

これより先は, Grice (1975)の主張した会話の論理に基づいた推論 (以下Gricean Reasoning) を聞き手がすることになり, 具体的には(21abc)のような思考プロセスになる.

(21) a. 話者はケンが受かったという主張行為を行った.
b. 対照主題によって派生した代替集合の中に, 他にされた主張行為はない.
c. 話者が他の主張行為をしなかったのには理由があるはずだ.

可能な理由としては, 例えば次のようなものがある.

(22) a. 話者は, エリカやマリが受かったかどうか知らない.
b. 話者は, エリカとマリは (たぶん) 落ちたと思っている. 或いは2人が落ちたことを知っている.
c. 話者は, エリカとマリは落ちたことを知っているが, 落ちたことをはっきり言うのは失礼だと思っている.

聞き手が(22a)と推論した場合, 話者の知識の不完全性, 不確実性と解釈されることから, 対照主題の典型的な意味効果が生み出される. しかし, 第2.3節で述べたように不完全性は話者の知識によるものだけとは限らない. (22c)の推論によれば, 話者の知識は完全であるのかかわらず, 言えることをあえて言わなかった, という発話行為としての不完全性となる. 一般的に言って, 対照主題は話者の立場からすれば「言い残し」という感覚があり, 一方聞き手にすれば「物足りなさ」を感じてしまうことになるが, こうした傾向は発話行為の代

替集合と、それに伴う Grice の会話論理から派生すると考えられる。ここで問題になるのは(22b)の推論で、これが可能な場合、不完全性は消えて完全な答、あるいは排他的な答(exhaustive answer)と解釈されてしまうのではないか、という疑問が出てくる。しかし(22b)のような推論はいつも可能ではなく、答えとしてフォーカスの可能性があるかないかに影響される。この点に関しては次節で詳しく分析する。また、仮に(22b)の推論をしても、「ケンを受かった」の後に、「でも、エリカとマリは受からなかった」という続きの文を期待してしまいがちである。その意味で、聞き手は話者が「だれを受かったか」に対して完全な知識を持っていると仮定しても、「ケンを受かった」を最終的な答えと見なししていない、と言えるであろう。

3.2. 新仮説の特徴、利点 および課題

新仮説の第一の特徴は普通の主題と対照の主題「は」の間に共通項を見いだすことができる、という点であり、これは既存の分析にない全く新しい観点と言える。発話行為がどの程度分構造に組入れられているかは未だに意見の分かれる所であるが、仮に本論で推定されているように発話行為が文構造の一部をして具現されたとして、発話行為のレベルよりも高いスコープをとるものがあるとすれば、最も可能性が高いものは主題であると言われている。例えば Krifka (2001) は Jacobs (1984) をふまえ次のように述べている。(Endriss to appear も参照。)

... Going one step further, one could argue that topics even *have to* scope out of speech acts. Topic selection is a speech act itself, an initiating speech act that requires a subsequent speech act, like an assertion, question, command, or curse about the entity that was selected. This was suggested, for example, in Jacobs (1984), where topics are assigned illocutionary operators of their own. (Krifka 2001, p.25)

訳：... もう一步進めて、主題は（ただ単に発話行為より高いスコープを取り得るのではなく）発話行為より高いスコープを取らなければならないと主張することも可能である。主題の選択はそれ自体が発話行為であり、その後の主張、質問、命令、など、主題に選択された個体に関する発話行為の実現に必要不可欠な行為なのである。この考えは既に Jacobs (1984) によって主張されており、Jacobs の理論では主題が独自の発語内オペレーター (illocutionary Operator) を伴っているとされる。

これに関連して、今回の分析の中で鍵となる要素が「対照主題の代替集合は発話行為レベルまで保存される。それまでに他のオペレーターの領域として使われてはならない」という点であることに注目してほしい。これは対照主題のフ

フォーカスの意味(代替集合)のスコープが発話行為レベルよりも上にある，ということと同義であり，「は」の役割が発話行為以上のスコープを具現化させるものと考えることにより，普通の主題と対照主題との共通点を見いだすことができるのである．さらに推し進めれば，対照主題が Logical Form (LF) のレベルで発話行為より高い位置まで移動するという仮説も可能であり，その場合「は」の2種類の機能の関連はより直接的なものとなるが，LF移動をサポートするデータはない上，問題点もいくつかあるため，現時点ではLF移動はないと仮定する．⁵

今回提案する「発話行為の対照としての対照主題」という仮説は，対照主題の助詞「は」にのみ適応される特殊の前提 (presupposition) や含意 (implicature)，特殊な意味のカテゴリー（例：Büring (1997, 2003) の分析で提案されたトピックの意味(topic semantic value)など) を必要としないという点で，これまでに提案されて来た分析の中で最も経済的なものと言える．また，分析の対象を発話行為のレベルで捉えることによって，平叙文以外の発話行為の文タイプでの「は」の使用や，話者の知識状況の不完全性以外の理由での「言い残し」効果（例えば礼儀的な理由）が説明できる．

こうした利点はあるが，現時点では解明の出発点に過ぎず，新たに生じる問題点，課題点もある．「発話行為の対照としての対照主題」という仮説は，別の観点から見れば対照主題の「スコープ理論的分析」とも言えることは，助詞の「は」の基本的役割との関連で既に述べた．対照主題という特別な産物があるわけではなく，高いスコープのフォーカス（発話行為レベルで演算されるフォーカス）として捉えられているからであるが，ではフォーカス自体はどう構造的に捉えられるべきであるか？ ここで暗示されているのは，対照主題よりも構造的に低い位置で演算されるもの，さらに具体的に言えば命題レベルで代替集合の意味が使われるケースを，一般的に言われているフォーカスとするという考えであるが，それとフォーカス特有の完全性，排他性の意味がどう関

⁵ LF移動に対する問題の一つとして，数量化詞の対照主題があげられる．前例の普遍数量詞「みんな」に対照の「は」がついた場合，フォーカスのスコープは発話行為レベルよりも上にあるが，意味論的スコープは否定の「ない」よりも低くなければならない．解決法としては，LF移動の際に残されたトレースを一般数量化詞句のタイプ ($\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$) とし，意味論的再構築 (semantic reconstruction) をするという方法があるが，意味論的再構築が強要されるというケースはこれまでに報告されていない．数量化詞の問題に加え，述語的範疇の対照主題（例：美しく**は**ある）のケースも，一般的に文頭への移動がほとんど見られないものであるだけに，対照主題の場合だけLF移動できるのはなぜか，という疑問も出てくる．その一方で，Hara (2006, Chapter 3) では対照主題の分布が，いわゆる Island Constraints の対象となると報告されていることは注目に値する．Haraの分析は対照主題の句を移動するのではなく，対照主題の句に付随した含意オペレーター (implicature operator) を動かすという解決法をとっているが，本論の分析では含意オペレーターは存在しないため，Haraの分析の応用は難しい．

連するのかを明示する必要がある。また、対照主題とフォーカスはどのような相互作用をもたらすか、とりわけ文中に対照主題とフォーカス両方が現れる場合の効果についての検証は欠かせない。

埋め込み文中の対照主題も、本論の仮説の重要な課題である。対照の「は」は主文だけでなく、「けど」「が」「し」などで接続された文内や、「思う」「言う」などの動詞に選択された従属文内にも使われる。もし対照主題が本論で提案されているように発話行為レベルの現象であるとするなら、対照主題を含む埋め込み文は発話行為の埋め込みという結論になるが、発話行為の埋め込みの可能性は研究者の間で必ずしも合意に至っていない。

また、本論は英語、ドイツ語の対照主題の先行研究が日本語には応用できないことを出発点としたが、日本語の対照主題の事象に基づいた本論の分析が、逆に西洋言語対照主題の解明に貢献できるかという課題が出てくるのは必至である。言語類型学的にみて、日本語の対照主題と同じ、又は酷似した用法を持つ言語（韓国語）がある一方、英語のように日本語的な対照主題が使えない言語がある。また、主題を言う概念を日本語や韓国語のように形態素で表現するのではなく、構文内の特定の位置によって表すマジヤール語などの比較は有効かつ必要不可欠であろう。

本論ではこうした課題点、問題点のうち、フォーカスと多少主題の関係に関する問題の一部（第4節）と埋め込み（第5節）に重点をおいて検証する。

4. フォーカスと対照主題との競合

4.1. 数量の表現＋「は」の解釈

前節では、対照主題の意味論的、語用論的效果が発話行為の代替集合の存在と *Gricean Reasoning* と通して導かれると言う仮説により、対照主題に伴う「言い残し」の感覚が、話者の知識状況の不完全性だけでなく礼儀やためらいなどの理由にも関連しうることを示した。勿論話者が代替集合の他の選択肢を取らなかった理由は「なんでもあり」というわけではなく、発話のコンテキストや、話者と聞き手の共有する知識などによって制約されることは言うまでもない。⁶ しかし、そうした非言語学的な制約だけではなく、言語学の領域内でも制約もあることは事実であり、代替集合をもとにした *Gricean Reasoning* だけでは説明の付かない例もある。その中で、言語学的な制約の必要性を最も明白に示すのが数量の表現の対照主題である。第2.2節で見た例文を再考してみよう。

(23) A: 明日の食事会に何人来るだろうねえ。

⁶ 例えば、前出の(16)における「だれが受かったの？」という質問に対して「ケンを受かった」答えたのが試験官であったならば、「エリカとマリが受かったかどうか、話者は知らない」という仮定は不適切であり、（礼儀等の理由で）エリカとマリについては言いたくない、などと憶測するのが自然であろう。

B: 3人は／3人は 来るでしょう。

(24) A: ハイブリッドの車って、いくらするもんなんですか？

B: まあ、25000ドルは／25000ドルはしますよ。

これらの例においては、数量の表現は「少なくとも」と意味になり（実際「少なくとも」という表現を付けても意味はあまり変わらない）、「ちょうど」と意味は取れない。「ちょうど」の意味は「少なくとも」の意味を包含するのであるから、「少なくとも」の意味の付加は意味の弱化につながる。(23)/(24)の例文は、数量の表現に対照の「は」使われた場合意味の弱化が強要されるという事実を表しているが、Gricean Reasoningによれば、意味の弱化が強要される必要はなく、「ちょうど」という強化された意味が取れてもよいはずである。そのプロセスを(23)を例として追ってみることにしよう。(23B)では、数量の表現「3人」が対照主題となっているので、(23B)のフォーカスの意味は(25)のような発話行為の代替集合となる。

(25) {1人来るだろうという主張行為, 2人来るだろうという主張行為, 3人来るだろうという主張行為, 4人来るだろうという主張行為, 5人来るだろうという主張行為, 6人来るだろうという主張行為, 7人来るだろうという主張行為...}

この中で、話者は3人来るだろうという主張行為を行ったが、それ以外は行わなかった。その理由は何であるか？最初の2つに含まれる命題は、「3人来るだろう」という命題に含意されるため、意味的に弱いものである。そういう命題の主張行為は、情報が偽にならない限り最大限提供するという Grice (1975) の Maxim of Quantity に反するものであるから、容易に排除できる。ではその他（3人以上の場合）はどうか？この際問題となるのは「話者は4人以上来ないことを知っており、「3人来るだろう」以外の主張行為は偽の主張となるためしなかった」という憶測が十分に可能であるという点である。この憶測が正しかった場合、話者は「ちょうど3人来るだろう／3人しか来ないだろう」と言う意味で言ったという結論になってしまう。

この問題の解決法として対照主題とフォーカスの比較という概念を提案する。この考えの根底にあるのは、対照主題が使われた場合、聞き手は文のフォーカスの意味として派生した発話行為の代替集合の比較だけでなく、対照主題とフォーカスという2つの強調のストラテジーの比較もしているというものである。具体的に(23)の例文で見ると、(23)と同じコンテキストでBは(23')とすることもできた。

(23') A: 明日の食事会に何人来るだろうねえ。

B: 3人来るでしょう。

Bの答えで、「3人」はAの疑問文の疑問詞「何人」に相当するため、Bの文のフォーカスである。そして、(23'B)では、フォーカスされ、かつ修飾語のつかない数量の表現に典型的な「ちょうど」というスケールの含意を持つ。対照主題とフォーカスという強調の2つの方法の比較を聞き手がしたとすれば、次のような推測になる。

- (26) 発話行為の代替集合には入っていないが、話者は「3人来るだろう」ということもできた。しかしそうは言わず、「3人は」を使った。その選択には理由があるはずだ。

仮に話者が4人以上来ないことを知っており、それ以外の主張行為は偽の主張となるためしなかったとしよう。その場合、話者の意図は「(ちょうど)3人来るだろう」というメッセージを伝えることであるが、それには「3人くるだろう」と発言すればよい。ところが、話者はそうしないで「3人は来るだろう」と発言したのだから、聞き手としては「話者が話者が4人以上来ないことを知っていた」という憶測を拒絶することになる。結果的には、「話者は4人以上来るかどうかははっきりわからず、それ以外の主張行為は偽の主張となる可能性があるためしなかった」という推測が最も適切であることになり、これが意味的には「少なくとも3人」という解釈になる。

対照主題とフォーカスという2つのストラテジーの比較、競合という考えは、(27)の擬似方程式に要約される。

- | | | | | | |
|------|------------------------------------|---|-------------------------|---|--------------------|
| (27) | 発話行為の代替集合を
ベースとした推測から
生まれた解釈 | - | フォーカスの
排他性から
出る解釈 | = | 対照主題
に可能な
解釈 |
|------|------------------------------------|---|-------------------------|---|--------------------|

(27)は、対照主題の効果を派生させるプロセスにさらに比較のステップを加えることで、対照主題の解釈に言語学的制約を与えるものであり、数量の表現の他にも多様な対照主題の現象に利用することができる。その点を、いくつかの例を挙げて検証してみよう。

4.2. 普遍数量の表現+「は」の制約

(27)の擬似方程式で、イコールの右側がゼロになってしまうと、対照主題に可能な解釈がなくなってしまうわけであるから、対照主題を使う理由がなくなってしまう。その場合、対照主題は使うことができないという予測になる。その例として、普遍数量詞が挙げられる。第2.1節の例文(6)で、普遍数量詞の対照主題と否定のスコープについて述べたが、普遍数量詞の対照主題は肯定文では使えない。

- (28) #みんなは/みんなは 来た。

仮に(28)が可能だと仮定して、そのフォーカスの意味としての代替集合を見てみると(29)のようなものになるだろう。

(29) {みんなが来た、という主張行為、大部分の人が来た、という主張行為、何人かの人が来た、という主張行為、1人も来なかった、という主張行為}

話者は(29)の中の選択肢のうちで、「みんなが来た」という主張行為をしたわけであり、聞き手は残りの主張行為がなぜされなかったかについて推測するわけであるが、どういう理由が可能であろうか？ 「1人も来なかった」という主張は「みんなが来た」という主張された命題と矛盾するものであるから簡単に排除できる。その他の主張行為の中の命題は、「みんなが来た」という命題に包含されているという意味で、そういう命題を主張するのは前例のように Grice (1975)の Maxim of Quantity に反するものであるから、これらも排除できる。しかし、問題はストラテジーの選択肢としてあるフォーカスであり、(28)のコンテキストで(28')が比較の対象となる点である。

(28') みんなが 来た。

この文では「みんな」がフォーカスであり、その結果、(28')のフォーカスの意味は(29)と全く同一になってしまう上に、その代替集合から生じる推論の流れも全く変わらない：他の選択肢の命題は、「みんなが来た」と矛盾するか又はそれに包含されるため排除される、という結論である。これを(27)の方程式にあてはめると、対照主題に可能な解釈がゼロになってしまう結果になるため、普遍数量詞の対照主題が肯定文では使えないことの説明が可能になる。

4.3. 「は」による意味の弱化の選択性

数量の表現の対照主題のケースでは、「ちょうど」という強化された意味の欠落が、対照主題とフォーカスとの競合の結果であることを検証した。フォーカスの排他性に起因する解釈が、対照主題の解釈から排除された結果であるが、このプロセスが正しければ、前述の数量の表現に見られる意味の弱化は、フォーカスとの競合がない場合にはおこらないという予測になる。

対照主題とフォーカスが競合しないケースには、例えば(30)のような例が挙げられる。

(30) A: ケンもエリカも受かったの？

B: ケンは／ケン は 受かった (けど)

B': #ケンが受かった (けど)

(30A)の問いに対し、対照主題は使えても普通のフォーカス(=フォーカスアクセントと格助詞「が」の組み合わせ)は不適切である。ここで重要なのは、(30B)の答で話者がエリカが受かったかどうか知らないという可能性の他に、話者がエリカが落ちたことを知っているという解釈も成り立つという点である。即ち、第4.1節の数量の表現で観察されたような意味の弱化が必ずしもおこらないということを意味する。これによりフォーカスと対照主題の競合がない場合には、強い意味の示唆も可能になるという予測は正しいことが検証された。⁷

また、対照主題の意味の弱化を主としてフォーカスとの比較の結果として捉えるならば、フォーカスに関連しない意味の弱化は起こらないと予測することになる。この予測が正しいかどうか、離接(disjunction)の「か」のケースを使って検証してみよう。

(31) A: 誰が受かるでしょうねえ?

B: マリかエリカが 受かるでしょう。

(31)のように離節の句がWh-疑問文の答えとして使用された場合、2種類の意味の強化がおこる。第一には、「マリとエリカの両方は受からない」という意味であり、これは接続詞(conjunction)「と」との比較を通して派生する、Grice (1975)のスカラー含意(scalar implicature)である。第二の強化された意味は、「マリとエリカ以外の人は受からない」という命題であるが、これは離節の句「マリかエリカ」がWh-疑問文の答えの中心であり、文のフォーカスであることに起因する。(31)と同じコンテキストで対照の「は」を「マリかエリカ」に加えると、フォーカスに起因する意味の強化は消去されるが、スカラー含意の意味は残る。⁸

(32) A: 誰が受かるでしょうねえ?

B: マリかエリカは / マリかエリカは 受かるでしょう。

⁷ この際重要なのは、「ケンだけが受かった / ケンしか受からなかった」などの排他性が明示された文は、対照主題の文と競合しないという点である。これは、数量の表現、5人、7個、などが普通「ちょうど5人 / 7個」と解釈される場合に、ちょうど5人 / 7個 という表現自体を考慮に入れてしまうと、望ましい含意が派生しないというケースと同じである。(Horn 1972を参照。)

⁸ スカラー含意を消すことも可能だが、その場合助詞の「か」か、あるいは「. . . のどちらか」にフォーカスアクセントをおくことになる。

(i) マリかエリカは / マリかエリカのどちらかは 受かるでしょう。

Bの発言を「しかしマリとエリカ以外の人についてはよくわからない／確証がない」といった意味に解釈することは極めて自然である。しかし対照の「は」が加えられても、Bがマリとエリカの両方は受からない」と思っていると印象は残る。これは、「マリとエリカは受かるでしょう」との比較によるスカラー含意の派生が、「は」を使った場合にも可能であるためと考えられる。

4.4. 対照主題とフォーカス：まとめと今後の課題

対照主題の解釈に際し、対照主題によって派生する発話行為の代替集合の他に、フォーカスと対照主題という強調の方法論的比較という仕組みが、いかに対照主題を意味論的／語用論的に制約するかについて見て来た。数量詞や普遍数量化詞などの数量化現象と対照主題の相互関連や、離節の対照主題の解釈などを通して、ストラテジー比較の過程で予測される事象が実際に存在することが示された。

本論では、ストラテジー比較において、フォーカスによる意味の強化という性質を前提とした上で、対照主題における強化の欠落の過程を考察したが、フォーカスの意味の強化、排他性がどのような過程で出てくるのか、という問題点が残っている。これは、フォーカスと対照主題が同時に現れる場合(例えば(33)の例文)に特に深刻な課題となる。

(33) A: 学生たちは何を食べた？

B: エリカは豆を食べた(けど) (= (5))

本論で仮定しているように対照主題が発話行為レベルにLF移動せずそのままの位置で解釈されるとすると、そのフォーカスの代替集合の意味が誤ってフォーカスの排他性の過程の対照となってしまう恐れが出てくる。この問題に関しては、Tomioka (2009) で詳細にわたって検証しており、本論ではその基本的な仕組みを簡単に紹介することにする。

フォーカスと対照主題との選択性に必要な理論的背景として、Tomioka (2009) では、Wold (1996) の選択性束縛 (selective binding) の理論と、Fox (2006) で提唱された構文内に具現化された排他性オペレーター (exhaustive operator) の分析を応用している。(33) の例を使うと、(33B) の文は(34)で示されるLF構造を持つとされる。

(34) [SAP OP_{1,2} [SAP Assert [IP Exh₂ [IP [エリカは]_{CT1} [豆を]_{F2} 食べた]]]]

(34)内での数字はフォーカス指標であるが、フォーカスの意味を演算するオペレーターは、そのスコープ内にあるフォーカスの意味を盲目的に利用するのではなく、フォーカス指標を共有するものに関してのみ選択的に利用するというシステムになる。また(34)において、対照主題の「エリカは」のフォーカス指標は排他性オペレーター Exh に束縛されていないこと、そして「豆を」に付属

するフォーカス指標 (= 2)が2つの異なったオペレーターに二重に束縛されている点に注目してほしい。前者は、本論の主張である「対照主題の代替集合は発話行為レベルまで保存される。それまでに他のオペレーターの領域として使われてはならない」という制約の具現化であり、後者は望ましい発話行為の代替集合を派生されるのに必要な要素である。また、フォーカス指標が二重に束縛される可能性、必要性に関しては Wold (1996) に具体例、詳しい説明がある。(34)のLF構造は、エリカが豆を食べたという命題の主張行為、エリカが豆以外のものを食べなかったというフォーカスの排他性から来る含意、そして対照主題の効果として、話者はエリカ以外の人が何を食べたか知らない／知っているが言いたくない、という不完全性の意味を出すことになり、(33B)の文の意味が正しく把握できることになる。

5. 対照主題、および発話行為の埋め込み

第2節で日本語の対照主題の様々な特質を列挙した際に、1つだけあえて触れずに置いた特質が、対照主題の埋め込みの可能性である。この問題は、対照主題を発話行為レベルで捉えようとする本論の分析とってだけではなく、他の分析、とりわけ「議論中の質問」(Question-under-Discussion: QUDと呼ばれる)を談話主題(discourse topic)と定義し、談話主題を対照主題の不完全性、非排他性の尺度につかう分析(例: Büring 1997, 2003, Kadmon 2000, 日本語の対照主題の分析では Yabushita 2008)にとっても難問であると言える。

Hara (2006, Chapter 3)で示されているように、埋め込み文内の対照主題には大きく分けて3つのタイプがある: 「けど」「が」「し」などの接続詞で接続された文内(35), 「言う」「思う」などの命題態度の動詞の従属文内(36), そして「ので」「から」で終わる理由節の中(37)である。

(35) a. エリカは来たけど、マリは来なかった。

b. ケンは来たし、エリカも来たけど、マリは来なかった。

(36) [ケンがマリには会ったと]エリカは思っている。

(37) [主賓はもう来ていたので] (全員そろっていなかったが) 時間通りに歓迎会を始めた。

これらの3つのタイプについて、発話行為の埋め込みという可能性と関連させながら考察してみよう。

5.1. 接続詞の場合

英語の接続詞 and/but/or が文を接続する際、意味論的には命題を接続する論理的オペレーターであると考えられているが、日本語の接続詞は命題を接続だ

けにとどまらず発話行為の接続という特質が顕著であるように思われる。例えば、(38)の例文にも見られるように、接続詞の「けど」「し」は異なる発話行為の文を接続することができる。

- (38) a. あそこに置いといた本なくなってるけど，誰か持ち出したの？
b. まだちょっと早いけど，もう終わりにしなよ／もう終わろうよ。
c. 暗くなって来たし，もう帰りなよ／もう帰ろうよ。

こうした例を日本語では簡単に挙げるができるが、類似した文を英語にした場合では **and/but** が使える時と使いにくい時があるように思う。この日本語の接続詞の特質を考慮すると、(35)のような例文も発話行為の接続であるという仮説は可能であり、文中に現れる対照主題の説明にも本論で提唱した分析が対応できる。⁹

またもう一つ重要な点は、離接 **disjunction** としての「か（あるいは）」で接続される文内には対照主題が使えないことである。

(39) A: 今回の新製品の提案が通る条件は？

B: ???社長は賛成するか，あるいは役員の過半数は賛成するかだ。

これは対照主題の不完全性、非排他性の意味自体が不可能な訳ではない。なぜなら、対照の「は」の代わりに「少なくとも」という修飾語をつけた場合、(40)に見られるように文には全く問題がない。

(40) A: 今回の新製品の提案が通る条件は？

⁹ 接続の構造において最初の接続詞に発話行為をしめす助詞のないものや、動詞句自体がないケースがある。例えば：

- (i) a. 鈴木君は，京都に行って／行き，山田君は，名古屋に行った。
b. 鈴木君は，京都に行って／行き，山田君は，名古屋に行け。
(ii) a. 鈴木君は，京都に，山田君は，名古屋に行った。
b. 鈴木君は，京都に，山田君は，名古屋に行け。

このような場合は、発話行為の接続という考えを維持しつつ、次のように分析することが可能である。(i) 両方の接続節に動詞句、および発話行為の構造がある。(ii) 発話行為の句のヘッド (Speech Act⁰) が ((ii) の場合は動詞のヘッドとともに) ATB移動する。

B: 少なくとも**社長**が賛成するか、あるいは役員の少なくとも**過半数**が賛成するかだ。

つまり、(39B)の意図する意味には問題がないが、その表現として対照主題が使えないということになる。離接接続文に対照主題の「は」が使えないという事実は、Krifka (2001)によって提示された、「発話行為の離接はできない」という一般化に沿うものである。

5.2. 命題態度の動詞の場合

命題態度の動詞の従属文内の対照主題の問題は、ただ単に従属文に現れると言うことではなく、Hara (2006)で指摘されているように、誰の視点からの不完全性なのかに関して曖昧性を持つという点である。例えば前出の(36)を見てみると：

(36) [ケンがマリには会ったと]エリカは思っている。

この文の不完全性は、(i) エリカは、マリ以外の人に関してはケンが会ったどうか知らないか、あるいは会わなかったと思っているというエリカの観点からの不完全性、または、(ii) 話者は、マリ以外の人に関してはエリカがどう思っているか知らないという話者の観点からの不完全性、の曖昧性を持つ。解釈の(ii)は、文全体の発話行為の代替集合から派生するもので特に問題はないが、解釈の(i)が成り立つためには、命題態度の動詞が命題ではなく発話行為を選択する、あるいは命題か発話行為の選択の曖昧性を持つ、と考える必要がある。

発話行為が命題態度の動詞に選択されるかどうかという問題は、多岐にわたる考察と綿密な検証が必要であり、本論で最終的な結論が出せるものではないが、少なくとも日本語の命題態度の動詞の従属文の場合、従属文内の形態素を見る限り、選択されるカテゴリーが命題よりもレベルの高いものである可能性があることを指摘し、今後の研究の焦点として取り上げたい。

日本語の命題態度の動詞の従属文で顕著であるのは、発話行為を表す助詞または活用形が従属文内でも使用される点である。

(41) a. マリは、エリカが誰とつきあってるか知っている。

b. マナは、ケンに猫を飼おうと提案した。

c. 社長は、社員に不正の証拠を消せと／消すように命令した。

これらの例を直接の引用の埋め込みとし、真の従属文ではないとする考えもあるだろうが、これには問題がある。

- (42) 社長が秘書に昨日までにその報告書を出せと命令したのにもかかわらず、秘書はすっかり忘れてしまっていた。

命令の発話行為は未来志向の行為であり、「昨日までに」出せ」という命令はできない訳であるから、(42)は直接引用ではあり得ない。それでも命令形の「出せ」という形が出ているのであるから、発話行為を表す助詞または活用形が従属文内でも使用されることと、直接引用とは切り離して考えるべきであろう。こうして見ると、少なくとも日本語では従属文の構造は典型的な IP/CP のだけでなく、談話に関する機能を持った構造も含んでいる、と考えることもでき、対照主題以外の最近様々な視点からその必要性が指摘されている発話行為の埋め込みの可能性 (Krifka 2001, 2002, 2004, Hasegawa 2008, Madigan 2008 など多数) との関連の模索が必要となるだろう。

5.2. 理由節の場合

正直に言って、理由節内での発話行為というのは最も正当化しづらいものであり、その意味で理由節内の対照主題の分析は、本論の提案する仮説にとって最も大きな難問と言えるかもしれない。だが、Hara (2006) で既に指摘されているように、理由節の中に話者あるいは文に出てくる人の観点が反映されているかどうか、対照主題の現れ方に影響している点に注目したい。

理由節には、大まかに言って二つのタイプがあるが、タイプにより異なる接続詞が使われるわけではなく、英語でも日本語でも同じもの (because, ので/から) が使用される。英語の例でタイプの違いを見てみよう。

- (43) a. The tree fell because a big storm hit our area.

- b. The company hired Tom because he can use Unix.

(43a) は2つの事象の因果関係を表現しているだけで、誰かの判断に関わるものではない。それに対し (43b) は、トムがユニックスが使えるということが、会社がトムを雇用すると判断した要因であり、この判断には会社の視点がかかわっている。Davidson (1967) では、前者がSingle Causal Statement、後者がCausal Explanationとして区別されており、前出の対照主題の例文は、Causal Explanationのタイプに属する。

- (37) [主賓はもう来ていたので] (全員そろっていなかったが) 時間通りに歓迎会を始めた。

「少なくとも主賓は」というスカラーの意味が、その後の行動 (歓迎会を始めるといふ行動) の判断の理由であると考えられるからである。これに対し、1番目のタイプには対照主題が現れにくいことが、Hara (2006) で指摘されている。

(44) ??[風は／風は 強かったので] 家の庭の木が倒れた。

このように、主文の主語の主観性が理由節の中にあるかどうか、対照主題に関係しているのであるが、発話行為の埋め込みに主語の主観性が必要条件であるという点で、(37)と(44)の差はある程度期待通りと言えるかもしれない。しかし、主語の主観性の存在だけで理由節内に発話行為レベルの構造が組み込まれているという証拠にはならない。この点は、今後の研究の課題である。

5. 本論の総括

本論では、日本語の対照主題の「は」の意味論的／語用論的效果について、発話行為との関連を軸に考察した。不完全性、「言い残し」の表現としての対照主題は、英語、ドイツ語等のプロソディーを使った表現を相通ずる側面がある一方、独自の特徴も数多くある。平叙文以外の発話行為文にも現れること、文の唯一のフォーカスになりうること、普通の主題と同じ助詞が使われること、といった特異性の分析として、「対照主題は発話行為の代替集合を派生させる」という仮説の下に、多岐にわたる現象を考察し本論の仮説の有効性を検証した。発話行為の埋め込みの正当化、本論の仮説の言語類型学的考察といった課題もあるが、対照主題にのみ適応される特殊の前提や含意、特殊な意味カテゴリーを必要とせず、他にも独自に必要とされているもののみを組み合わせることで分析が可能であるという主張は、これまでに提案されて来た分析の中で最も経済的なものであり、また普通の主題と対照主題との共通点を、助詞の「は」の存在と機能をからめて理論的に考察することを試みたのは、本論が初めてである。

対照主題の問題は、音韻論、統語構文論、意味論、そして語用論と幅広い言語学の分野にまたがる現象であり、その複雑性、多様性などを考慮すれば、本論はその問題に対する最終回答というよりは、ある方向性への出発点と考えるべきであろう。その意味で、本論が対照主題の研究への関心の高まりと論議の活発化につながることを期待したい。

References

Beck, Sigrid (2006) 'Intervention Effects Follow from Focus Interpretation', *Natural Language Semantics* 14: 1-56.

Büring, Daniel (1997) 'The Great Scope Inversion Conspiracy,' *Linguistics and Philosophy* 20: 175-194.

Büring, Daniel (2003) 'On D-trees, beans, and B-accent,' *Linguistics and Philosophy* 26: 511-545.

- Carlson, Lauri. (1983) *Dialogue Game: An Approach to Discourse Analysis*, Dordrecht: Reidel.
- Davidson, Donald. (1967) 'Causal Relations,' *Journal of Philosophy*: 64, 691-703.
- Endriss, Cornelia. (To appear) *Quantificational Topics – A Scopal Treatment of Exceptional Wide Scope Phenomena*. Doctoral dissertation, 2006, University of Potsdam, *Studies in Linguistics and Philosophy*, Springer.
- von Fintel, Kai. (1994) *Restrictions on Quantifier Domains*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts at Amherst.
- Fox, Danny. (2006) 'Free Choice and a Theory of Scalar Implicature,' ms. MIT.
- Grice, Paul (1975) 'Logic and Conversation,' in Cole, P. and J. Morgan, eds. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Hara, Yurie. (2005) 'Contrastives and Gricean Principle,' in Paul Dekker and Michael Franke (eds.) *Proceedings of the 15th Amsterdam Colloquium*, University of Amsterdam, 101-106.
- Hara, Yurie. (2006) *Grammar of Knowledge Representation: Japanese Discourse Items at Interfaces*, Doctoral Dissertation, University of Delaware.
- Hara, Yurie, and Robert van Rooij (2007) 'Contrastive Topics Revisited: a Simpler Set of Topic-Alternatives,' Talk presented at NELS, University of Ottawa.
- Hasegawa, Nobuko. (2008) 'Licensing a Null Subject at CP: Imperatives, the 1st Person, and PRO,' in *Scientific Approaches to Language* (2008), No. 7, pp. 1-34. Kanda University of International Studies.
- Horn, Laurence (1972) *On the Semantic Properties of Logical Operators in English*, Doctoral Dissertation, UCLA.
- Ishihara, Shin-ichiro (2002) 'Invisible but Audible Wh-scope Marking: Wh-constructions and Deaccenting in Japanese,' in Mikkelsen, L., and C. Potts (eds.) *The Proceedings of WCCFL 21*, Somerville: Cascadilla Press, 180-193.
- Ishihara, Shin-ichiro (2003) *Intonation and Interface Conditions*, Doctoral Dissertation, MIT.
- Jackendoff, Ray. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, Cambridge: MIT press.
- Jacobs, Joachim (1984) 'Funktionale Satzperspektive und Illokutionssemantik,' paper presented at *Linguistische Berichte*.

Kadmon, Nirit. (2001) *Formal Pragmatics*, London: Blackwell.

Kratzer, Angelika. (1991) 'Representation of Focus,' in A von Stechow and D. Wunderlich (eds.), *Handbook of Semantics*, Berlin: De Gruyter, 825–834.

Krifka, Manfred (1998) 'Scope inversion under rise-fall contour in German,' *Linguistic Inquiry* 29:1: 75–112.

Krifka, Manfred (2001) 'Quantifying into question acts,' *Natural Language Semantics* 9: 1-40.

Krifka, Manfred (2002) 'Embedded speech acts,' handout for the talk given at Workshop *In the Mood*, Graduiertenkolleg *Satzarten: Variation und Interpretation*, Universität Frankfurt am Main.

Krifka, Manfred (2004) 'Semantics below and above speech acts,' handout for the talk given at Stanford University.

Kuno, Susumu. (1973) *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge: MIT press.

久野暲 (1978) 談話の文法. 大修館書店.

Madigan, Sean William (2008) *Control Constructions in Korean*, Doctoral Dissertation, University of Delaware.

Nagahara, Hiroyuki (1994) *Phonological Phrasing in Japanese*, Doctoral Dissertation, UCLA.

Ohima, David, Y. (2008) 'Morphological vs. phonological contrastive topic marking,' in *Proceedings of CLS*, vol. 41 (Main Session): 371–384.

Pierrehumbert, Janet and Mary Beckman (1988) *Japanese Tone Structure*, Cambridge, MA: MIT Press.

Rooth, Mats. (1985) *Association with Focus*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts at Amherst.

Rooth, Mats (1992) 'A Theory of Focus Interpretation,' *Natural Language Semantics* 1:75-116.

Tomioka, Satoshi. (2009) 'A Scope Theory of Contrastive Topics,' in *Current Issues in Unity and Diversity of Languages: Collection of the Papers Selected from the CIL 18*, 2282-2296.

Wold, Dag, E. (1996) 'Long Distance Selective Binding: The Case of Focus,'
Galloway, T., and J. Spence (eds.) *Proceedings from Semantics and Linguistic Theory*
(*SALT*) 6, Cornell University, 311-328.

Yabushita, Katsuhiko (2008) 'A New Approach to Contrastive Topic: Partition
Semantics and Pragmatics,' to appear in *Semantics and Linguistic Theory 18*,
Cornell University.